青色オヤジン

むうら

●青色オヤジン

作者むうら

省ちゃんの浪人生活は四畳半の畳の上からはじまった。

一九七六年春、省ちゃんは京都の下宿で大学受験浪人をやっていた。京都は、石ころを投げれば学生に当るといわれるほど学生の多い町。省ちゃんは受ける大学受ける大学すべりにすべり倒して浪人になった。だからというわけではないが、多くの学生にうずもれて、浪人という自分の身分が隠せる京都の生活は、省ちゃんをプレッシャーから開放した。下宿の名は気楽荘、上賀茂神社のほんのちかく、四畳半賄いつき、家賃五万円。

下宿仲間が七人。金ちゃん、ボッス、だっちゃん、谷川、お医者、だがや、山下。そして省ちゃんがいた。偏差値ではかれば玉石混交だが、人間味のあるいい奴らばかり。それぞれ、さまざま、悲喜こもごも、くんずほぐれつ百様の浪人生活を謳歌していた。

藤森省太。通称省ちゃん。

そろそろ五十歳のオヤジン。

ある日公園のベンチでぽっかぽかの太陽をあびながら寝っころがって昔を思い起していた。

「ボッス、今晩観察に行かへん?」

「えっ、今日? オレ月曜日にテストがあるんだけど」

「ええやん勉強は。明日もあるし。天気よさそうやし」

五月下旬の夏をおもい起こさせるように気温の高い、カラリと晴れた土曜日。だっちゃんがボッスを誘っていた。

だっちゃんは大阪出身の元不良学生。ボッスは、東京出身の元暴走族のヘッドで少年院で更生して、大学を目指していた。

「じゃあ、行くか。だっちゃん、みんなも誘っててくれる」

「OKOK、そう来んとね」

だっちゃんは早速、軽やかに階段を駆け上がって、二階にある金ちゃんの部屋の戸を慌ただしくたたいた。

「お〜い金ちゃん。入るよ」

言うか言わないかのうちに、すでに戸を開けて中に入っていた。

「なんよ、騒々しいなぁ」

金ちゃんは机に向かって、ややこしい数学の問題を解いている最中だった。

「金ちゃん、金ちゃん。今日、行くで」

せっかく解きかけた問題の邪魔をされ、面倒臭そうに座っている椅子に手をつき、体を反転させてだっちゃんの方を向いた。

「どこ、行くん?」

金ちゃんが聞いた。

「円山公園よう。絶好の天気やで。絶対いっぱいおるで」

「またか。もう三回目やん。そんなおらんて」

「今日は大丈夫やて、土曜日やし、ぬくいし。最後までやってるで」
いささか興奮したように、だっちゃんは立った人間をだっこするように、腕で輪っかを作って、卑猥な腰つきをしてみせた。
「ええて、分かった。省ちゃんは行く言うてた?」
「いや、ボッスと金ちゃんにしかまだ知らせてない」
「そう。ほんなら、ボクが誘っとくわ」
金ちゃんは、岡山の山奥の出身。浪人エリートが通う大近畿予備校に受かって、そこからの斡旋でこの気楽荘に入っていた。大近畿予備校は、神戸大学レベル以上の学力がないと入れないといわれる超難関予備校。そのわりには遊び好きで、面倒見もいい気さくなあんちゃんといったタイプだった。省ちゃんとは初対面から、気が打ち解けて、最も仲のいい友達になった。
「省ちゃん。今晩、観察に行くで」
いきなり戸を開けて、金ちゃんが省ちゃんの部屋に入った。
省ちゃんは、真っ昼間というのに、万年床の布団にこもり、何やらシコシコやっている途中だった。ガラッという音がした途端、エロ雑誌とティッシュを布団に潜り込ませ、「エホッ、ヴフッ」としたくもない咳き払いをしてみせた。
「何しとん。調子悪いんか」
金ちゃんは、そう言いつつ、察したようだった。
「円山公園、行くやろ」とだけ言って、出ていった。
天気のいい夜に若者が公園にこぞって出かけるといえば、だいたいお察しがつくと思うが、ホモサピエンスの雄雌の春先における交流行動の「観察」に行くのである。ひらたく言えば、いわゆるノゾキである。しかし、決してノゾキと言われるような下品な行為ではない、と言っておこう。黒装束をして、懐中電灯や双眼鏡、カメラをしのばせて、おさわりまでやらかすといった、病的なものではなく、研究熱心というか若気のいたりというべきか、兎に角、こっそりとカップルを観察しては、脳裏に刻んで、研究室である下宿に帰って空想で行動分析をするのである。省ちゃんたちにとってはれっきとした「観察」だった。の、か?
気楽荘の食事は午後五時三十分から七時三十分の間。大家さんが住んでいる離れの食堂に行き、好きな時間に、好きなだけ、食べる事ができる。
まだ二時すぎ。夕食を済ませて円山公園を目指すには、時間が早い。

省ちゃんが京都で浪人をしようと思ったのには、訳がある。兵庫県の片田舎に生まれ育った彼にとって、外の世界に飛び出すのは、始めての経験だった。浪人をするのも、田舎を離れるのも、よほどの覚悟が必要だったのだが、実はただ、高校の友人である「いちやん」こと曽根一郎が「浪人をする限りは、ちょっとマシな大学に入らんとアカンから、京都大学を目指すんや。京大に行く限りは、京都の予備校に通ったほうが有利に違いない」なんて、根も葉も幹すらほとんどない理屈で「京都に行く」という話に乗ってしまったからである。
幸か不幸か、省ちゃんはその時、小学校の就学旅行で金閣寺に向かうバスの窓から京都の風景を眺めながら、「こんなところに住んでみたいなぁ」と思っていたのを思い出していた。それで、「ボクも京大に行くわ」の一言で、京都に出ることになった。

京大といえば、日本有数の大学。田舎の高校生にとっては高値の花であるが、学部によっては、さほど偏差値の高くないところもあった。だからバカじゃあいけないけれど、ちょっとバカぐらいなら、まぐれで合格する可能性もなくはなかった。なくもなかったが、ある訳でもなく、慎重な反面、子供のように単純な幼い性格が見え隠れし、こんなことで京都での浪人が決まった。

みんな夕食時間前には、すでに食堂に集まっていた。
「おうちら早いね。もうできてるからすぐ出すわね」
下宿のおばさんは急かされるようにテーブルの上に早々と夕食を揃えてくれた。
「谷川とだがやは?」
誰にとはなく省ちゃんが聞いた。
「今日は、行かへんのやて」
だっちゃんがこたえた。
「ダメじゃないですか。観察は受験生のりっぱな勉強ですよ。いかなきゃぁ」
お医者がいつもの口調で戯けて言った。
お医者は、京都大学を一年足らずで中退して、医学部を受験しなおすために、再び受験生になっていた。なんでも大学に行ってみたものの、「やってる講義は面白くもなければ、役に立ちそうにもない。こんなんじゃダメだ」ということで、医者を目指そうということになったらしい。
省ちゃんなんて「通ればどこの大学でもええわ。勉強から解放されて自由の身になりたいんや。とはいえ、有名な大学にいかんと恥ずかしいからなぁ」というような、いい加減な気持ちの受験生だったから、いたくうらやましく感じていた。
谷川とだがやも食堂にやってきた。
「なんで、行かへんのん?」
顔を見るなり、省ちゃんが不満そうに聞いた。
「あかん。レイコと映画見に行く約束したし。もっと前から決めといてくれんと無理やわ」だがやは、「きょうはしんどいがぁ。また今度いくわ」と、声をそろえるように言った。
谷川は、こと女性に関しては、電光石火のごとく素早く身をこなす軟派師。だがやは名古屋の方言からこう呼ばれていた。
「残念やなぁ」
誰とはなく、面白可笑しく抑揚をつけて言葉を発した。
観察組の六人は、ガツガツと夕御飯をかき込んでから、
「ほんじゃあ、行ってくるわ」と言い残して、揚々と食堂を出ていった。

観察地の円山公園までは上賀茂からバスや市電を乗り継いで一時間近く。
京都市内でもっとも古くからあったでかい公園で、祇園から続く道には料亭が軒を連ねる。広さだけでなく、時間のディメンションを含めると、省ちゃんたちの観察には、無限の可能性が秘められていた。
公園に入ると、省ちゃんと金ちゃんとお医者、ボッスとだっちゃんと山下の、三人ずつ二組に分かれた。大人数過ぎても、少なすぎてもア・ヤ・シ・イ。もっとも男だけでウロウロしているのは、どう足掻いても不自然なのだが、そんなことは百も承知だった。

日は落ち、空には雲ひとつなく、月明かりも降り注いできた。気温もころあい。観察の条件は整っている。
案の定カップルはたくさんいた。
しばらくウロウロと観察すべきカップルを物色した後、お医者が池の縁の傾斜のついた芝草に座っているカップルに目をつけた。会社帰りのサラリーマンとＯＬといった感じだった。すっかり、暗くなり、月明かりがたよりになっていた。カップルは公園の灯が届きにくい暗がりに座っていた。
「いましたよ。省ちゃん、金ちゃん。あやしそうですよ」
三人は満身の眼力をこめた横目でじっと観察しながら、池を隔てた園道をできる限り自然を装い、すっと歩いてカップルを横切った。
男は左肩に寄り掛かった女の髪の毛を右手でゆっくりと撫でながら、話すようすもなく、湖面に視線を落としている。女はきっと目を瞑っている。
「いくでいくで、完璧や。もうすぐや」
省ちゃんは、嬉しくてたまらないようすだった。
「よし、カップルの後ろから回って攻めよか」
金ちゃんがちょっと緊張した面持ちで言った。
「それじゃぁ、見えにくいじゃないですか」
「いやぁ、押し倒すようにして寝転がりよるで」
お医者の言葉に冗談まじりに省ちゃんがこたえた。
三人が後ろに回ってみると、はたして、すでに女は押し倒されていた。ごく自然の流れでそういう格好になっていたはずだが、省ちゃんには半ば強引に押し倒されたと思えた。
省ちゃんは生まれてこのかた、キスの経験も無い。数あるグラビア誌やエロ雑誌で、アタマん中は、純情ものや際ものの濡れ場シーンが、グチャまぜになり、パンパンに膨れ上がっているだけだった。
「うあっ、やってるで、やってるで」
先頭をきってカップルの後ろに回った省ちゃんは、二人を振り返って、押し殺す声で言った。
「見たらわかるわ」
金ちゃんは、つい今しがたまでの緊張した感じからは程遠く、落ち着いていた。
三人は、カップルから四、五メートルはなれた園木の茂みに隠れた。
女は仰向けに横たわり、男の顔が女の顔に覆い被さっている。
「おいおい、キスしてるで。ああっ、乳まで揉み出した」
省ちゃんは、心の中で、叫んでいた。
勘づかれないかという怖さと、ポルノ映画を見ているような興奮とで胸が高鳴っていた。省ちゃんはこんな決定的なオイシイ場面に出くわすのは始めてだった。男の手が女の右胸のあたりを厭らしくまさぐり始めた。やがて、ボタンを外しているような仕草をしたかと思うと、ふっくらとした白い胸の膨らみが月の薄明かりに反射するかのように、見えた。
ブラジャーらしきものが、上にずれている。その瞬間、
「あっ、ボクあかんわ」
省ちゃんが鼻を押さえていた。
金ちゃんが聞いた。

「何しとん、省ちゃん」
「はなひ、はなひ」
「何？」
「は・な・ち、が出た」
　するとお医者が、ポケットからハンカチをだし、手渡しながら言った。
「こんな時に、やめてくださいよ。今からがいいところなんですから、我慢してください」
「ゴメン。けど、こんな時やから、鼻血がでたんや。我慢できるもんやないわ」
　三人はできる限りのヒソヒソ声で話していたが、カップルがすくっと起き上がり、足を投げ出して座る体制に戻った。どうやら回りの異変に気付いたようだった。
「まずい。逃げよう」
　カップルは反対側を向いていて、振り向くそぶりもなかったが、焦った省ちゃんは、一言いうなり、ガサゴソッと大きな音をたてて、逃げだした。あたり構わず、ダッシュした。三十メートルほど走ってから、何事もなかったかのように歩き始めたが、省ちゃんはハンカチから鼻血をダラダラもらしていた。
　すぐ後から金ちゃんとお医者も息を切らせながら追いかけて来た。
「省ちゃん、何すんの。今からがええとこやったのに」
「そうですよ。省ちゃんの鼻血を見たって、面白くもなんともないですから」
　二人から批難を轟々とあびた。
「僕かて、出しとうて出したんやないわ」
　言葉を返しつつ、背後から追っかけて来られはしまいかという不安感と、男女の秘め事を覗いてしまったという後ろめたさ、それ以上に、自分のふがいなさに、受験に失敗したときよりも滅入った気分になっていた。
　三人は足早にその場をはなれた。他の三人を探したが、見当たらず、そのまま帰路についた。

　気楽荘はその日の夜中、報告会で盛り上がっていた。省ちゃんは報告会には出なかった。恥ずかしくて出られなかった。省ちゃんの部屋から一番離れたボッスの部屋に集まっていたが、時折、アハハハ、と楽しそうな笑い声が聞こえてきた。
「省ちゃん、気にすることあらへん。出ておいでえよ」
　金ちゃんが呼びにきてくれたが、断った。
　それ以来、省ちゃんは、「観察」に参加するのをやめた。

　省ちゃんは、下鴨神社の境内のすぐ近くにある予備校に通っていた。予備校は、講座選択制で、好きな講座を勝手に選ぶシステムだった。国立の理科系を目指していた省ちゃんは目一杯の講座を取っていたが、夏を迎えるころには、授業をサボることが多くなっていた。
　朝は苦手だった。目覚めるころには、もうとっくに授業は始まっていた。ひどいときには、気がつけば、昼を過ぎていることもあった。それからむっくり起き上がり、予備校に出掛けた。
　ある朝、珍しく早起きをして、一時間目の授業を受けに向かった。いつものように加茂川べりの土手上の遊道をオンボロ自転車に跨がって、途中の果物屋でリンゴを一つ買って、

かじりながら、予備校を目指した。
　北大路橋を過ぎ出雲路橋にさしかかるころ、土手下の広場に一組の男女が向かい合って、じっと立ち尽くしている姿が目に入った。しばらく自転車を進めて見ていたが、話している風でも、抱き合う風でもなかった。
「こんなに朝早うから、何やっとんやろう」と思った瞬間、「ピシッ」というしめった音が、だいぶ離れていた省ちゃんにも聞こえた。
　女は、一、二メートルほど飛ばされて、倒れた。男が、女の顔をいきなり、平手で打ったのだ。
　男は女のほうにくるっと背中をむけて、振り向きもせずにスタスタと早足で、去っていった。
「おいおい、ホンマかいな。ドラマみたいやなぁ」と思いながら、自転車の速度を最大限に落として、よろよろしながらゆっくり走った。
　女は倒れたまま、微動だにしなかった。
「大丈夫なんかなぁ……。見るだけ見て知らん顔しとこ」と、真横あたりを素通りした。
　少し過ぎてから気になって振り返ってみたが、女はまだうつぶせたまま、まったく動いていないようだった。男の姿はもう消えていた。
「ひょっとして、頭でも打ってて、意識がないんかもしれん。怪我してるかもしれん。誰もおらへんし、ボクがこのまま放ってて、打ちどころが悪かったら、死んでしまうかもしれん。明日の京都新聞に、加茂川で女の死体が見つかった。死因は頭部打撲。警察は関係者の行方を追っている。なんて記事が出たらどうしよう」なんていう妄想が、次々と浮かんだ。
　省ちゃんは、ペダルから片足を降ろして止まり、自転車を持ち上げるようにして方向を変えて、女のほうへ向かった。女は動く様子がない。土手上に自転車をとめると、勇気を振り絞って駆け寄り、おそるおそる声を掛けた。
「あのぅ、大丈夫ですか」
　女は、はっと我にかえったように、起き上がり、「あっ、うん」とだけ言って、走るようにして、土手に登り、そのまま、反対方向に下って行った。気絶していたようでも怪我をしているようでもなく、余りのショックにただ、じっとひれ伏せて、男との経緯を頭のなかでいろいろ巡らせていたに違いない。
「歳のころは十八、九。ボクと同じぐらい。結構可愛かったなぁ。持ち物はなかった。きっとこの近くに住んでいる子に違いないな」なんて、省ちゃんはあっけにとられながら女の去ったほうを見たまま、でも、冷静に分析していた。
　なぜか、感動もした。
「何やったんやろう。男と女の関係はどう見ても恋人同士としか見えなんだけど、真相はどうなんやろ。その後、どうなるんやろ」などと、疑問が次々と沸き上がってきた。そうしたところで、どう分かるものでもなく、その日は何事もなかったように終わった。
　何日か経っても、同じ場所を通るたびにそのことを思い出していた。この辺りは橋の上からも川を隔てた対岸からもはっきりと見渡せる見晴らしのいいところだ。省ちゃんは、ある日もここを通るころに「なんでこんな人目につくところで、思いっきり女にビンタを食らわせられるんかなぁ。よっぽどやなぁ」なんて思いながら、二時間目の授業に間に合うかどうかの時間だったが、あせることもなく、のんびりと自転車を走らせていた。

河原にはベンチに座っている人影。それがだんだん大きく近づいてくる。省ちゃんは、その姿に目が釘付けになった。遠くの方では気にもとめていなかったのだが、近づくにつれ、「この間の彼女と違うんか」という思いが強く彼を支配した。

はっきりと特徴を覚えていたわけではなかったが、小柄でショートヘアー、それより全体からうける雰囲気が、「きっとそうに違いない」と確信させた。彼女はただ、ぼんやりとした視線を川の方向にむけ、物思いに耽っているようすだった。

見ず知らずの女性に対してウブで奥手な彼だったが、どうしても声をかけなければならないという義務めいた意識が高まっていた。真相が知ってみたいと思う以上に、彼女にいわれもない恋心をいだいていたのかもしれなかった。

自転車から降り、一直線に彼女を目掛けて近づき、

「すみません。横に座っていいですか」と、尋ねた。

彼女は、面を食らったようにびっくりして省ちゃんを見上げ、思わず

「あぁ、うん」と答えた。

「あの、ボク、この間ここで見てしもたんです」

省ちゃんは横に座り、いきなり切り出した。

彼女は、一瞬にしてほとんどのことが飲み込めた。黙ったままだった。

「女の人がひっぱたかれてたんですけど……。どうしてもその人のことが気になってて。大丈夫だったんかなぁとか、どうしはったんかなぁとか、ここを通るたびに、いつも考えてしまうんです」

唐突に言われて、彼女がどう思うかなんて省ちゃんには女性を慮るほどの人生経験はなかった。でも、今の彼女は、見ず知らずの男からストレートにこんな話をされても、受け入れてしまうほど落ち込んでいた。泣き尽して、かえってスッキリしていたのかもしれない。

「うん。あたし」

彼女は答えた。

「ええっ。そうなんですか」

確信して近づいたのにもかかわらず、驚いたようすをみせた。

「大丈夫だったんですか」

「うん。……あの時声を掛けてくれた人でしょう。何でもなかったの」

「そうですか」

流石の幼い省ちゃんも、それ以上、話を突っ込むのは悪いと気がついた。

「ゴメンなさい。嫌な事を思い起こさせてしまったようで」

「もう、いいの。忘れたから」

彼女は少し口元をゆるめて、微笑んでみせてくれた。

「迷惑じゃなければ、もう少し話してていいですか」

「いいよ」

省ちゃんにしては上出来である。いつもなら、たとえこんな場面になっても「それじゃぁ」で帰ってしまう。

「京都の人やないみたいですね」

「うん。東京から」

「ふ～ん。何でまた京都に来たんですか」

「なぜって、ちょっとね」
　彼女は言葉を濁したが、省ちゃんは聞き流した。
「大学生ですか」
「そう。この近くの大学」
「この近くといえば、京都府大?、同志社?、同女?、ダム女?……」
「まぁ、そんなところ」
　話してみると彼女は意外と明るく、さばさばした性格のようだった。省ちゃんには先日のインパクトが強く、あの日以来、未だにベッドに伏せて泣き続けているような印象しかなかった。
「大学生か。いいなぁ。ボク、浪人で予備校に行ってるんです。うらやましいなぁ」
「へぇ、予備校生なんだ。じゃあ、きっと私と同じ学年ね」
「あっそう。今年入ったばっかしですか。ほんじゃぁ、タメ口でよかったんや」
　彼女もそう聞いて笑った。
　省ちゃんは彼女が少し心を開いてくれたようで嬉しかった。
「ボク、藤森省太。みんなには省ちゃんて、呼ばれてマス」
「上加奈デス」
　語尾をあげておどけるように言うと、彼女も同じように返してくれた。
　自分でも驚くほど、見ず知らずの女性と気さくに話す事ができた。彼女も話すことで明るさを取り戻したように思えた。省ちゃんは、「これはきっと運命の出合いに違いない」と勝手に思い込んだ。恋愛経験の薄い幼い個体が陥りがちな錯覚だが、この場合は、まったく外れている訳でもなかった。
「ここには、よく来るんですか」
「ここって、ここ?」
　彼女はベンチを指差しながら省ちゃんを見た。省ちゃんがうなづくと、
「ヤな思い出の場所だけれどね。結構気に入っているの」
「ボク、予備校の行帰りにいつも通ってるんで、また、見かけたら声を掛けてもいいですか」
「うん。いいよ。でも今度は、タメ口でね」
　やさしそうに微笑んで言った。
　もっと話していたかったが、何を話していいかも分からず、
「予備校の授業が始まるんで、また」と言って腰を浮かせた。
「じゃあね。ありがとう。省ちゃんに会って元気がでてきたよ」
　小さく手を振ってバイバイをしてくれた。
　今までにない経験だった。まったく見ず知らずの女性に話し掛けたことも、知り合えたことも、気持ちが行交ったであろうことも、すべてが夢の中の出来事のようだった。彼女のひとつひとつの言葉は短かったが、その口調は省ちゃんの耳に透き通るように、やさしく木霊した。

　その夜、気楽荘に帰ってから金ちゃんにその日あったことを報告した。お医者も途中から金ちゃんの部屋に入ってきていた。
「よくやりましたねぇ。でも電話番号も住所も聞かなかったんですか」
「なんしとんよ。ちゃんと聞かにゃぁ。お茶でも飲みにいくとか、今度あうんだったら、いつ、どことか。しっかりせんと」
　二人から、いろいろと指摘された。

「けどボク、いっぱい、いっぱいやったんや」
「いや、最初のその勇気があれば、電話番号を聞くことなんては簡単なことじゃありませんか。今からでも行って、聞いてきなさい」
「そんな、アホな」
　省ちゃんは「ようやったな。スゴイな。うらやましいわ」と言ってもらえると思っていただけに、批判を受けたようで、がっかりした。
「こないだ言ってた、ぶん殴り事件の真相はわかったん?」
　金ちゃんが聞いた。
「ぶん殴りやのうて、ビンタや」
「フフン、ぶん殴りにしてたほうがおもしろいやん」
「なに、なに。何ですかそれって」
　お医者が口を挟んだ。
　省ちゃんは、四、五日前に遭遇したビンタ事件のことをざっと話した。
「うはっ。面白いですねぇ。どういう状況でそうなるんでしょうかね。女の浮気に男が我慢しきれずに切れたとか」
「妊娠してしまった子をおろせとか、おろさないとかで、殴り倒したとか」
「いやいや、実は殴られるのに快感を覚えてるなんてのもあるんじゃないですか」
「それっ、SMやん」
　二人は冗談まじりに好き勝手なことを言った。
「そんな子やないわ」
　省ちゃんはムッとしたように言った。
「スマン、スマン。でもほんなら、何いよ? 真相はどうなんよ」
「もう、そんなんどうでもええわ。とにかくボク、彼女とつき合うから」
「ほうっ。でももしか省ちゃんが付き合うことになって、ボクに紹介されたら、殴打事件のことが気になってしょうがないやん。それだけは聞いといてくれる」
「殴打やないって、ビンタや」
「つき合うったって、電話番号も住んでるところも知らないんでしょう。だからちゃんと聞いておかないからですよ」
「それに、そのビンタした男との関係がどうなったんか、ちゃんと知っとかんとマズイんとちゃう」
　お医者の言葉に金ちゃんが追い討ちをかけた。
「わかった、わかった。今度おうたら、きちんと聞いとくわ」

　省ちゃんは眠れない夜を過ごした。昼間、彼女と話した一部始終や、彼女と男の関係やビンタ事件の真相がどうなのかという憶測が、何度も頭ン中をグルグル回った。金ちゃんやお医者が言ったこともよく噛み締めた。もし、彼女が悪女なら、つき合えば、とんでもない目にあうかもしれない。でも、彼女と少しの間話しただけだったが、人懐っこく、素直で可愛い性格のように思えた。何よりも面食いの省ちゃんにとって、人気アイドル似の美形は魅力だった。
　彼女も省ちゃんを気に入ってくれたと感じていた。
「よしっ、今度あった時に、すべてを聞こう」と決心した。
　それからというもの、予備校を休むことはなかった。

毎日、加茂川の土手に自転車を走らせ、遠くのほうからベンチ付近の人影を探した。予備校の昼休みには近くの店で昼ご飯がわりにパンを買って、河川敷に足を運び、彼女の座っていたベンチに腰を降ろした。雨の日にも、かすかな期待を胸に、バスに乗らずに、傘をさして自転車に跨がった。

授業の空きの時間には、ビンタ事件の時に彼女がかけ降りていった方角にある住宅街を、自転車でウロウロした。でも、彼女の気配すら感じられなかった。

省ちゃんは「やっぱり、ボクの妄想だったんかなぁ。運命のいたずらなんてあるはずもないんや」と、弱腰になった。せっかくの初恋にも似た出会いが、このまま終わることはないのだが、省ちゃんのサボリ癖はまた始まった。

京都に来てから、省ちゃんは時折ひとりで京都見物を楽しんでいた。気楽荘の面々と行くこともあったが、ひとりが多かった。それは名所旧跡を訪れるというよりは、辿り着くまでの街並や自然から受ける風香がなんともいえず心地よかったからである。「浪人生といえども、息抜きは大切である」と言いながらも、気楽荘での浪人生活は、ほとんど毎日が息抜きの連続だった。

浪人というのは、大学合格を目指して日々勉学に努めなければならない厳しい身分。田舎で育った省ちゃんは、浪人すなわち地獄の日々という思いもあった。でも、田舎を離れてはじめて、自由らしきものを知った。知ってしまった。

親や家族、ご近所の目からは解放され、孤独と思っていたものが、たくさんの浪人友達もできた。高校生のように授業に縛られることもなくなった。門限もない。何もかもが新しい経験だった。知らない土地で、ポンとはじけた。生まれ持っていた不精癖や放浪癖が目覚めてしまった。

浪人って「こんなに楽しい身分だったんや」

京都タワー、金閣寺、御所、二条城、平安神宮、清水寺、嵐山、嵯峨野など、ひととおりの観光名所は巡った。それはそれなりにいたって楽しめた。でも、京都の魅力は、別のところにあった。それは住んでみないと分からない。

逆に、住み着いてしまっても分からない。京都人にさえ京都の底知れぬ風情はわからないと思えた。旅情と相まって始めて、いとおしさが溢れてくる。京都にかぎらず、どの土地にでも共通して言えることかもしれないが、京都は特に、そういった土地柄なのだ。

京都市内の移動はバスよりも自転車のほうが便利だった。バスや市電を乗り継ぐと一時間、自転車だと二十分ということもザラだった。予備校へも自転車だったが、そのことが、省ちゃんの放浪癖に拍車をかけてしまった。知らない土地で、いろんな道や路地裏をやみくもにくねっていると、かならず面白いものにぶちあたる。

まるで、歩き始めた幼児が、デパートの玩具売場に放たれたように、よだれを垂らしながら、右へ左へ、前へ後ろへ、よたよたと歩いては立ち止まり、人形の腕や頭をちぎっては投げ、踏んでは壊しの、好き放題の状態になった。

「あした、京都散策にいかへん?」

土曜日の夜、省ちゃんは久々に金ちゃんをさそった。

「どこ行くん?」

下敷きを団扇がわりに顔や体を扇ぎながら、金ちゃんは聞いた。

金ちゃんに予定はないようだ。
七月になっていた。
「銀閣寺あたり」
「有名所に行くんは、京都の通やないとか言うとったんちゃうん？」
「いやいや、それはそれで過程が面白いんや」
「そうかぁ。まぁ、行ったことないから、行こか」
金ちゃんは、期待する風でもなく、かといって嫌そうでもなく答えた。
日曜日の昼ちかく、二人は自転車に乗った。
浪人生の朝は遅い。
「東の方から回って行ってもええ？」
「どこからやって、かまわへんよ。ついてくわ」
金ちゃんにこだわりはない。
省ちゃんは散策の時にはいつも、なるべく通ったことのない道を選んだ。気楽荘を出て、上賀茂神社前を東に折れた。道路沿いを流れる明神川は神社の洗礼を受けて澄み、小魚の群れを目でおっているだけでも、一日が過ぎていく。
方角だけは銀閣寺を意識し、幹線道をさけ、田畑の風景をぐぐり抜ける。高野川を横切り、北白川の瀟洒な住宅街を角ごとに折れながら南下し、白川に着く。銀閣寺は幹線道からちょっと奥まったところにある。
「有名どころはやっぱり人が多いなぁ」
金ちゃんが言った。
「けど、なんか優越感ゆうか、占有感ゆうか、感じられへん？」
「なんで？」
「みんな遠いとこから、時間かけてわざわざ来てるやん。ボクら自転車でいつでもすぐ来られるやろ」
「そぉかぁ？」
会話を重ねながら、二人は散策を楽しんだ。ひととおり銀閣寺を見たあと、吉田山や京都大学、百万遍あたりをウロウロして、鴨川へ出た。
もう夕方になっていた。
暑い中を自転車だけでなく、歩き回ったことで、二人ともだいぶ疲れていた。
「あぁ、しんど。もう帰ろか」
金ちゃんは、先に走る省ちゃんの後ろから声をかけた。
「うん。疲れたわ。帰ろ」
自転車を漕ぎながら後ろを向いて省ちゃんは言った。
加茂川沿いに走り、省ちゃんがいつも通学している土手のルートへ向かった。「ひょっとしてカナさんが居るかもしれない」という思いもあった。
車も通らず、近道だ。しばらく走り、出雲路橋に差し掛かったころ河川敷を見遣った。人影はまばらだった。ひとりでいる若い女性は見当たらなかった。
「あぁ、やっぱり居てないよな」と思った瞬間、ベンチに座っている一組のカップルが目にとまった。
その女性の横顔は、遠くからだったが確かに記憶にある顔だった。
「カナさんや」

省ちゃんは自転車のブレーキをかけて、立ち止まった。
「わっ、あぶないなぁ。何で急に止まるん?」
金ちゃんは前につんのめりそうになった。
黙っている省ちゃんの目線の先を追うと、カップルがいた。
「省ちゃん、しょうがないなぁ。けどこんな明るいうちから何にもしよらへんで」
「いや、違うんや。前言うてたあのビンタされた女性や」
「はぁ、ホンマかぁ。男と、おるやん」
「うん」と言って省ちゃんは黙った。
「やっぱり男と別れてなかったんや。ひょっとしたら、別の男かもしれへん。あんな可愛い子、誰もほっとかへんわなぁ。やっぱりボクには無理やったんや」
アタマの中で考えて、勝手にへこんだ。
「省ちゃん。残念やったなぁ。けどまた、ええ事もあるって」
考えていたことが分かったかのように、金ちゃんが慰めてくれた。
その時、男が彼女を抱き締めようとしたように見えた。彼女は立ち上がり、土手に向かって走りだした。男もすぐに追いかけて、土手の中腹あたりで追いついて、彼女の腕をとった。
男が走り出すと同時に省ちゃんも自転車を猛スピードで漕ぎ出していた。
「きっとまた殴られる」
咄嗟にそう思った。
「省ちゃん。やめとき」
金ちゃんの制止も耳に入らなかった。
近づくと土手に自転車を投げ出し、二人に駆け寄っていった。
「やめて、離して」
彼女は叫びながら男の手を振りほどこうともがいていた。
「ちょっと待てって。まだ話が終わってないだろう」
男は、声を荒げていた。その中に省ちゃんが割ってはいった。
「もう、やめとき。彼女嫌がっとうやん」
「なに、君!」
男は急に腕をつかまれ、驚いて上ずった声を出した。
こんな場面では、「なんじゃい、お前は!!」と強面の形相で威嚇してくるのが相場だが、ちょっと拍子抜けした。
「この人の知り合いや。何があったんか知らんけど、やめときいよ」
省ちゃんは怖さが幾分かやわらいだが、足はガタガタ震えていた。
「キミには関係ないだろう」
男の声はうわずったままだった。ボコボコに殴られ、殺されてしまうかもしれないというような緊張感は微塵も感じられなかった。
「殴られそうなん、ほっとけへんわ」
省ちゃんが食い下がると、男はバツが悪くなったように、彼女を掴んでいる手を離して、「加奈、いくぞ」と彼女に向かってきつく言った。
「あたし、行かない。先輩とはもう二度と会わないから」と、省ちゃんに身を寄せた。
男は、しばらく彼女を睨み付けていたが、何もいわずにその場を立ち去った。
「先輩って何や。恋人やなかったんか。いや、そんなことはないやろう。加奈とか呼び捨てに

してたし。それより今の奴がビンタ事件の奴と同じか」なんていろいろと思いを巡らせた。
　でも、何がなんだか理解できなかった。
「ゴメンネ、カナさん。いらんことしたかなぁ」
　とりあえず、省ちゃんは、謝った。
「えっ、何?」
　彼女が聞き返した。
「余計なことして、ゴメンね」と繰り返した。
「余計じゃないよ。ありがとう」
　彼女は、じっと省ちゃんの目を見て言った。
　金ちゃんがゆっくりと近づいてきた。
「大丈夫か?省ちゃん。彼女も大丈夫?」
　省ちゃんはまだ顔がこわばっていたが、彼女はいたって冷静な様子だった。
　省ちゃんは彼女に向かって言った。
「あの、ボクと下宿が同じで、浪人友達の金ちゃん」
　金ちゃんと彼女はお互い気まずそうにはにかんで、「どうも」とうなづくように少し頭をさげた。
「省ちゃん、ボク先に帰っとくわ」
　金ちゃんが、気を回した。「ちゃんと彼女とうまくやれよ」と暗にほのめかした気遣いだった。それには「この間のビンタ事件のこともしっかり聞いといてや」という意味も込められていた。
「お茶でも飲みにいこうか」
　彼女が誘ってくれた。
　でも、省ちゃんはまったくの二人きりで話したかった。
「もうちょっと、ここで話させてもらっていいですか?」
「前に会った時に、こんど会ったらタメ口でねって言ったでしょう」
　彼女はクスリと笑った。
「うん。そしたらそうさせて貰います」
「ホラ、それがおかしい」
　二人は、顔を見合わせて笑った。
　まるで、ずっと以前から知っている者同士のようだった。

「この間会ってから、ボク、ずっとカナさんのこと探してたんよ」
「私も時間がある時は、河原に来てたよ」
　省ちゃんは心臓がドクッと高鳴った。
「ほんと?」
「うん。ほんとうだよ」
「けど、今の男の人って、誰。恋人?」
「うん。そうだった。でも今は違うの」
　彼女は答えた。
「嫌だったら答えんでええんやけど、ボクが最初カナさんを見たとき、なんで、叩かれてたん?」
　彼女は「うん」と言ったきり黙ってしまった。
「ゴメン、もう聞かへんわ。ゴメンな」

彼女を覗き込むようにして謝った。
「彼、私の一つ上の先輩だったの……」
彼女はふたたび話し始めた。
省ちゃんはやっと真相がきけると思ったのと同時に、聞くのが怖くなった。
「あっ、もう話さんでええわ」と言ったが、彼女は続けた。
「いいの。聞いて。高校二年の秋に、私の方から告白したの。OKしてくれて、付き合い始めた。でも、先輩は受験で忙しかったの。合格するとすぐに引っ越しで、結局は、長距離恋愛ってやつ。あまり会えなかった。私も先輩のいる京都の大学を選んで、来たんだけど、もう、新しい彼女ができてたみたいで、すごく冷たくなってた」
省ちゃんは、「うん、あぁ」とため息のような相槌をうちながら、聞いていた。
「私が京都に来てから、何度か会ったんだけれど、人が変わってしまってた。きっとつき合ってる彼女のせいで、そうなったんだと思って、私、その女性のことを調べたの。何人も男の人とつき合ってた。いい人なら、私もあきらめようと思ったけれど、そんな人を好きになってたなんて嫌だった」
「それで、ここで、その話をしたんや」
「うん。先輩もじっと黙って話を聞いてたけれど、私が話し終わって、しばらくしたらバシッって。その瞬間、何も覚えてないの。気がついたら、あなたが目の前にいた」
省ちゃんは、話を聞いてほっとした。彼女は思っていたとおり性悪女でもなく、随分純真な少女だった。恋愛に関しては省ちゃんと同じ幼い臭いがした。
「それから、私、先輩に何度も電話したけれど、もう取り合ってくれなかった。そんな時、ベンチに座っているとあなたが声をかけてきたの。私、嬉しかった。だから、時間のある時には、ここに来てしばらく座っていたの」
省ちゃんには、天地がでんぐりかえるほどの衝撃だった。自分が好きになった女性から、こんな話を今までの人生で聞いた事がなかった。舞い上がった。
「これから省ちゃんて呼んでくれる。みんなからそう呼ばれとるから」
「うん。じゃあ、私はカナでいい」
「でもカナは、なんでまた、その先輩とあってたん?」
恥ずかしげもなくカナと呼んでみた。
「うん。今度は、先輩から電話があって呼び出されたの。きのう」
「どう言うて?」
「ちょっと話があるから出て来てくれって」
省ちゃんは、ちょっと顔をしかめた。
「それで会ったら、もう一度やりなおそうって。でも、信じられなくて」
省ちゃんは恋愛経験は幼かったが、本や雑誌を鵜呑みにした知識はあった。
「女性っていうのは、カラダの関係を持つと何があってもその男と別れられない」
そういうガセネタを信じ切っていた。
そのガセと彼女の話をもとに「彼女はまだ処女のままだ」と男に感謝した。
「それで、私、嫌だって言ったの。そうしたら……」
省ちゃんは言葉を遮った。
「もう、ええやん。そんなん関係ないわ。聞いたボクが悪かったわ」
勝手に先読みした内容に答えるようにして、謝った。

きっと男は彼女に強引にキスをしようとして、彼女が逃げていった場面を省ちゃんたちが見ていたのだろう。

「カナさん。ギュッってしてもいい?」

一度はカナと呼んでみたものの、やっぱり呼び捨ては、気がひけた。

辺りはもう薄暗くなりかけていた。

「えっ」と言ってからほんの少しの間をおいて、

「うん」と彼女はほとんど声に出さずにうなづいた。

省ちゃんは、思いきり、ギュッと抱き締めた。

夕暮れの加茂川は、省ちゃんにとって地球のどこよりも感動的だった。空を飛ぶ鳥も、茂る木々も、浅瀬の波も、すべて薄闇のソフトフォーカスがかかったようだった。雑草でさえ、畑一面に咲き乱れるれんげのように感じられた。

省ちゃんが気楽荘に帰ると、金ちゃんが待ち構えていたように、部屋に入ってきた。

「省ちゃん。どうなった?」

嬉しくてたまらないように聞いた。

「うん。ボクもう、結婚するわ」

またまた話は飛躍した。

「なんよ、それ。ホンマかいな」

「冗談や。けど、ボク本気やで」

省ちゃんは幼さを発揮した。

「しょうがないなぁ。そんで、あの件はどうやったん?」

「あぁ、ビンタのこと」と言って、彼女から聞いたことをそのまま話した。

「ふ〜ん。なんやよう分からんけど、まぁええか……。風呂でも行こか」

すこぶる不服そうな口調だった。金ちゃんとしては、もっと奇抜な展開を期待していたに違いない。

「お〜い。みんな風呂いこか」

金ちゃんは、廊下に出て大声で叫んだ。

「うぉ〜い」と何人かが返事した。

「三分後に玄関な」と言って、風呂の用意をしに部屋に戻った。

気楽荘に風呂はなかった。歩いて数分の風呂屋に通っていた。玄関に行くと、山下とだがやが待っていた。金ちゃんもすぐに来た。みんなセッケンとシャンプーを入れた風呂桶を抱え、タオルを首にぶら下げて、サンダル履きだった。

同じような格好をした大学生もパラパラと風呂屋に向かっていた。この辺りには、京都工業大学の学生も多く下宿していた。

「近所の人ら、ボクら見て京工大の学生やと思とうやろな」

不満そうに省ちゃんが言った。

「それ、どえろう悲しいだわ」

だがやが続けた。

「ボクは嬉しいけどなぁ」

山下が言うと、